

～59歳、来院経路で「家族が直接」がそれぞれ入院と有意な関連を認めた。

文 献

- 1) 飛鳥井 望, 他: 精神科救急医療の実態—首都圏7施設共同一斉調査の結果から—精神神経学雑誌 96: 122-137, 1994.

7 地域における幼児健診の現状について

稲月まどか

黒川病院

新潟県下越地域2市町における平成21年度の3歳児健診の現状について報告する。

胎内市は平成21年3月末時点の人口31,394人、県北部の農村地帯である。年間出生数は200人前後でここ数年減少傾向にある。一方平成17年4月1日に4町村が合併して1町となった阿賀町は福島県境にある山間部で、平成21年3月末人口13,294人である。年間出生数は60人前後で減少傾向が続いている。

平成21年度の2地域の3歳児健診の受診率は胎内市99%、阿賀町100%であった。両地域とも3歳児健診の受診率は高く、この受診率を生かした保健活動や子育て支援が有用になると考えられた。

3歳児健診では言葉の遅れ、落ち着きのなさ、こだわりの強さ、睡眠覚醒リズムの乱調、感覚過敏など発達障害を示唆する(発達障害特性)行動上の問題や対人的相互性、言語発達の遅れを有する子供が胎内市では全受診者の27.5%阿賀町は34.5%あり、概ね3割の受診者が発達障害特性を有していた。また発達障害特性を有する子供の性比は胎内市で約3:1、阿賀町で約2:1で障害種別ではASD圏が最多で両地域とも健診受診者の17%次いで虐待を背景に含む多動を主とした群が胎内市で6%、阿賀町で9%見られ、MR群は胎内市5%、阿賀町8%であった。

家族や養育者自身に経済的・心理的・社会的な問題があり孤立していたり、子育てに援助が得られず身体的にも問題を抱え要支援と考えられる家庭が胎内市では34%、阿賀町は25%あり、

またこれらの家族が今回明らかになった発達障害特性を持った子供を育てている割合は約4割であった。

家族や養育者が支援の特別なニーズを持っているかまたは子供が発達障害特性を有している家族の割合(要フォローケース)は胎内市47.7%、阿賀町50%で全受診者のおよそ5割がフォローが必要と考えられたが、発達障害を有している子供がその後1年間の間に積極的な何らかの相談や医療受診などフォローにつながったのは胎内市52.5%、阿賀町18.2%と地域によって差がみられた。現時点では3歳児健診は幼児の公的健診としては最終になるためフォロー体制の整備が今後さらに必要になると考えられた。

出生時点で低出生体重児であった子供の割合は、胎内市は全受診者の4%、阿賀町は12.5%であった。早産を含む低出生体重児が3歳児健診で発達障害特性を有している割合は高く、胎内市で70%、阿賀町で50%であった。

母子保健は子供の一生に関わるメンタルヘルスの礎となるものであり、子供の出生から途切れのない家族へのきめ細かい支援と子供の発達を促すシステムや施策が必要とされている。

8 脳磁図を用いた視線認知に伴う脳活動の測定 —自閉症スペクトラムの病態解明を目指して—

長谷川直哉・北村 秀明・村上 博淳*

笹川 睦男**・亀山 茂樹*・染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野

独立行政法人国立病院機構西新潟
中央病院脳神経外科*

同 精神科**

自閉症スペクトラム障害(ASD)とは対人相互反応、コミュニケーション、限局された行動や興味の範囲によって定義される症候群であり、近年社会脳(social brain)の障害という観点で議論されることが増えてきている。しかしながらその神経基盤について脳機能画像などの客観的手法によって評価する試みは未だ発達途上の段階で